

# 歌に触れる

遊 縁 の 衆 (人生を数倍楽しむ会)

平成二十四年十一月十七日(第十五回)

(佐藤 紀之)

のぞき込む便器の白が目にしみる磨き上げたる僕の勲章  
僕の声仲間の声と共鳴し同じ心に今染まっている  
朝夕の寒さの分だけ燃える秋近づいている明日を思いつ  
たつぷりとメディアに浸かる君の脳疲れの悲鳴が笑顔を奪つ  
誰しもがする過ちの後ごつする勇気が君の人生拓く

(佐藤 亮照)

はや十年決断し我ここに立ついにしえの祖いかに思わん  
雪深く新緑萌えて酷暑過ぎはや一年と目に沁みる紅  
アンコール瀬戸の花嫁吹きし後亡娘の好きし歌と涙す

(佐藤 志亮)

幾千の流るる灯笼道となり浄土へつづく迷わぬよつた

(黒沼 貞志)

雲が湧き山も滴り街中も涼風まじななとおり花の香運ぶ  
カッコウに野鳩加わり半夏生遠雷うげん幽か朝の香深し  
珍しき朝のかみなり夏匂うカッコウ鳴きやみ短きしじま

昼下がり小暑のうたた寝破りしは夢路に届きしカッコウの声  
食卓の自前のトマト晴れ晴れと今年の出来映え美味さを増して  
アジサイの花にとけ込む母娘いせつれ何を語らう彩りの中  
魅せられしあじさいの花撮り比べ何処へ送らん便利な携帯  
玄関に蝉と空蝉横たわり力尽きしか羽根やわらかき  
家中にカサプランカの香り充ち今年もひと時心遊ばん  
町内の子供みこしの慎ましさをわが家に近づき遠のく夏口  
父の日に届きし鉢に実かたわわ期待を籠めてひとまず冷凍

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

新涼へゆきつもどりつ庭先の出番を控え虫たち忙し

この暑さ気付いてみれば過ぎし処暑身体折り合つ曆と自然

入道といわし雲との鬨きあい起し初秋里山の上

役目終えゴーヤのカーテンゆらゆらり色づく蔦に秋の風見ゆ

スタートの朝連励む散歩道出会いし父娘挨拶すがし

烈風に水面の漣舞踏会お釜さながら生きたキャンバス

朝まだき新聞受けの笠に露届きし便り秋の足音

週一のフィットネス終え浸かるスパ簾を揺らす新涼の風

## 月山で詠みし三首

月の山錦織りなし天高く碧落無限心満ちゆく

山の道傍らにくいる小さき実西日の中に陰際立たん

木道の傍ら際立つ蒼と白夫婦の如く寄り添つ二輪

## 蔵王で詠みし六首

一筋のヒコキ雲に誘われて歩み強めん目指す頂き

山頂に集つ人々それぞれに下界の様に秋は歩みて

ゲレンデの広さを一人手に入れて心ゆるまん秋の野遊び

車止め魅入る先には群れ尾花時を惜しまん野辺の夕ぐれ

山の道赤き実を指し妻が言つ「自然の中で見るのが一番」

谷向こつ秋の陽浴びてもみじ照り老いた夫婦に時間が流れて

## (中村 昌平)

わらび園日差しに焼かれ動かす手流れる汗とこぼれる笑顔

接近すレンズ全く気にならず第七回目のもみじ茶会